
神父服の彼

蜻蛉

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

神父服の彼

【Nコード】

N8082X

【作者名】

蜻蛉

【あらすじ】

神父服を着た騎士の物語。

転生キャラではないのでご注意ください。

1・0 研究所（前書き）

不定期です。

今回は三人称オンリー

1・0 研究所

雲一つなく月が爛々と輝くある日。既に時間は深夜であり、多くの者は寝静まっている。

そんな時間帯の古びた研究所には一人の神父服を着た少年と、修道服を着た小柄な少女の姿があった。

研究所の中は長らく使われていないようで、至る所に埃が被っており散々たる状況だ。

「ホントにあんのかよ。」

「周りに気を付けてね。あんまり変な場所とか触ったらダメよ?」

「……ユニゾンデバイスのくせに偉そうにしゃがって」

「何か言った?」

「別に」

自身の肩に乗る小柄な少女の声と研究所の状況を見て、溜め息を吐き、苦々しい顔をする。

少年は自身の赤い目をキョロキョロとさせ、何やら探し物をしているようだ。年の頃は、大体12歳といったところか。

あどけなさが全身から溢れており、研究所の異様な雰囲気と重なり奇妙な光景となっていた。

その少年は、一言で言えば端正な顔立ちをしている。

その顔は少女に間違われることはないだろう。

だが整っており同世代の子供達が見かけたら、10人中7人は振り向くであろう。

一方、少女は長い白金髪と青く澄んだ瞳をしている。そして端正な顔立ちをしており、修道服を着用していた。

その姿は可愛らしく、多くの者が好意的に彼女を見るだろう。

「おっ、これか」

どうやら探し物が見つかったらしい。

少年―彼は、長く腰まで伸ばした灰色の髪をなびかせながら、目的の場所まで歩く。

「ちょっとクウェス！いきなり触ったらダメよ？ちゃんと確認してからだからね！」

「発見、発見」

そして古びた戸棚まで近付くと肩で騒ぐ少女を無視して、躊躇することなくガラス張りの扉を開いた

その時

辺りに騒々しくサイレンが鳴り立てて始めたのだ。それは一つのことが決定したことであり、研究所全体が赤い点滅ランプにより覆われ始めた。

「はあ！？何で警報装置が作動してんだ！？」

目の前にある回転灯と音を聴いた彼は、戸棚の中にあるモノをしつかりと取り出しながら、怒ったように声を荒げた。

「……だから勝手に触るなって言ったのに」

その少年の肩の上では、少女が目も当てられない、と言った感じに呆れている。

「ルナ！何で止めてくれなかったんだ！」

「アタシは止めたわよ！この馬鹿クウエス！」

「ちげえよ！この施設の防御機構をだ！この馬鹿ルナ！」

「ここに入る前にアンタが止めなくていいって言ったんでしょ！」

「……って、喧嘩してる場合じゃねえよ」

「無視！？」

そう少女ルナが言った瞬間、勢い良く研究室の扉が開いたかと思うと、次々に人型の魔導兵器が入ってきた。

その姿はスマートと言う感じではなく、ちょっとや そつとの魔法は効かなそうなゴツゴツとした外見をしており、手には凶悪そうな鈍器を持っていた。

「うわっ。捕縛用じゃなくて殲滅用の機体じゃないか。一体、この研究所は何してたんだろっな？」

「どうせ祿でもないことよ」

「まあ、それはそうだが」

「ほら、早く片付けて帰るわよ」

そう呑気に話をする二人に構うことなく、侵入者を排除するために動き始めた魔導兵達は素早く彼らに近付く。

そしてその一体が持っていた鈍器を躊躇なく勢い良く振り下ろした。

ドオン！という力強い音が辺りに響く。なかなかの力で振り下ろされたようだ。生身の人間では太刀打ちできないだろう。

砂埃が辺り一面に舞い、晴れる頃には彼の無残な姿が

「よええ」

晒されることはなかった。

彼は、その場に立ったまま右手で鈍器を受け止めており、一方ルナは眠たげに目をこすっていた。

「ほら、目的物は入手したんだから早く帰ろうよ。シャッハにまた怒られるよ」

「へいへい。それにしても、昔のガーディアンは弱いのだ」

彼がそう言いながら、右手に黒光りの魔方陣を展開させ、持った鈍器に力を入れた瞬間

弾けた。

鈍器だけではない。それを持っていた魔導兵までもが、跡形なく弾け飛んだのだ。

「よええ」

ルナに即され、歩きながら、赤い目をギラギラと獰猛に輝かせた彼は

「だが、練習相手にはなるか」

次の魔導兵（獲物）へと右手を伸ばした。

1 : 1 教会（前書き）

彼はどこかネジがずれてる設定

時代は新暦69年

この時代だと原作主人公達は13歳だったかな

1・1 教会

「起きて！時間遅れちゃうよ！」

新暦69年。

それが今の年代だ。

そして、研究所からブツを確保して数日が経っている。勿論、任務は大成功だ。研究所は少し壊れたが、問題ないだろう。

「ちょっとクウェス？聞してる？」

「うつせえな。聞してるよ。」

私は、隣で浮かびながら、ピーチクパーチク騒ぐルナに相づちを打つとベットから体を起こす。

ふと顔を横に向けると、窓からは朝陽が入り込み、部屋全体を照らしていた。

どうやら朝が来たようだ。最低で最悪な朝だ。

一言で言うならば

「眠い」

「ほらほら、早く着替えて着替えて」

朝は苦手だ。何というか……テンションが、そうテンションが上がらないのだ。

「カリムのとこ行くの明日にしようぜ。寝たい」

「ダ・メ。新しい任務の話があるのよ」

「……仕事めんどくさい。他の奴に任せようぜ」

「ほらほら早く!」

再度言おう、非常に朝はだるい。どうして朝がやってくるのだろう

か。永遠に夜だったらしいのに。

「クウエス！」

それにしても

「さつきから、ピーチクパーチクうつせえよ！起きてるよ！私の頭はフル回転だ！このチビが！」

人の耳元で叫ぶコイツにうんざりだ！怒鳴ってもいいだろう！もうちょっと静かに起こせないのか！

そう言うことだから、後一眠りさせてもらおう。

おお、ベッドの中は何と心地の良いことか。これなら一瞬にして

「…………アウトフレーム・フルサイズ…………」

安眠できそうだな。

「おやすっ「起きなさい！！！！」おわ！？」

……最悪だ。まさか、フルサイズになってまで起こすとは!？

今の私は首根っこを掴まれた猫のようである。非常に情けない姿だ。私は12歳だぞ！屈辱的だ！しかし、そんな羞恥心よりも今は

「……寝かせてくれ」

「最初からこうすればよかったわね」

聞いちゃいない。コイツは私の話を全くと言って聞いちゃいない。

てか何だ？そのジト目は？

私の身長より15cm程高くなったルナは、私を抱え上げながらジト目で此方を見ている。

喧嘩売ってんのか？

「あんだよ？やんのか？」

それでも私は戦闘力においてはピカイチなのだ。

ただのユニゾンデバイスに負けるわけがない。ギッタンギッタンに
してやるよ！

私に怖いものなどないのだ！

「……アタシのお仕置きとシャツハのお「よっしゃあ……目指せ、
大聖堂……」」

まったく、今日も良い朝である！ べ、別にシャツハが怖いわけ
ではないぞ！

…

…

…

あれから数時間後

シスターシャツハの恐怖のお仕置きに怯え……ではなく、朝の眩しい
光を受け、目が覚めた私は目的地まで歩き到着していた。

目的地はミットチルダ北部にある我らがセイオウサマーを崇める大聖堂。

ここには直属の上司であるカリムがいるのだ。

横でふわふわ飛んでいるルナを連れ立って、煌びやかな光沢を放つ扉を開け、中に入る。

教会の広いエントランスには、様々な人間がいた。

私と同じ様に神父服の者、ルナと同じ様に修道服の者、そして騎士甲冑姿の者が目に見える。

奴らは聖王教会騎士団に所属する騎士やその見習い達だろう。朝っぱらからガヤガヤと元気良く騒いでいる。

朝から馬鹿みたいに騒いで楽しいのか？
騒ぐぐらいなら、私は睡眠を取るが……

そんなことを考えながら、奥にある執務室まで歩く私に、馬鹿共が群がってきた。

まったく朝から困った奴らだ。

「あーおはようございます!」

「おはようございます!」

ふっふっふ、歩く度に人が道を開き、お辞儀をしながら礼節を取っている。

いやあ、私も偉くなった

「おはようございます!騎士ルナ!」

「はい、皆さん。おはようございます」

……ような感じだ……

それにしても

周りの奴らと楽しそうに挨拶をしているルナが眩しく見えるのは、病気だろうか。

そして男共がルナと挨拶する度にムカムカするのは何故なのだろうか。

あとで医務室に行った方がいいかな？

「また見習いの小僧と一緒にいらっしやるぞ」

「ガキのお守りなんて大変だよなあ」

「我らのアイドルを独占しやがって!」

てか、さっきから私を馬鹿にするような声と、殺気がビンビン飛んでくるのだが

殺してもいいのだろうか？

うむ、殺気を私に向けて放つと言うことは、殺し合いをしようよ！
と言うことだよな！

「よし！殺し合いだ！」

出始めにルナと喋っているクソヤロウから殺し

「あだっ!？」

「何やってるのよ。馬鹿なことは止めなさい。」

「あにすんだよ！」

「何でもかんでも壊す方向に考えるのは、止めなさいって言うてるでしょ？本当に怒るわよ？」

むっ……既に怒っているではないか。 そんなに怒った顔で言わなくてもいいじゃないか。

今から楽しい楽しい殺戮の始まりだったのに……

興ざめだ。

実に興ざめである。

「ほら、行くわよ」

「へいへい」

殺し合いをするテンションでもないからルナの指示に従おう。

これ以上、ルナを怒らせたらシャッハが飛んでくるからな。

でもルナに近付いたクソヤロウ共は今度殺っておこう。

1・2 通路（前書き）

短い

今まで書いた中で最低記録更新

1・2 通路

その後、周りにいた騎士達から見ると、ふわふわと浮かぶルナを横に從え

……ではなく、確実に從われたまま彼はエントランスを抜けたようだ。

「騎士ルナ！おはようございます！」

「はい、おはようございます」

「ハヨー」

「こら！ちゃんと挨拶しなさい！」

現在、彼は行く先々で挨拶をしているルナを横目に、おざなりに挨拶をしていたようだ。

ルナに注意された彼は、どこか不機嫌そうな顔をする。

「オハヨウゴザイマスー」

そして渋々と修道服を着た女騎士に挨拶すると、その場を去ろうと歩き始めた。

「ごめんね」

「いえいえ、昔に比べたら喋るようになったじゃないですか。

……でも独り立ちするのは当分先みたいですね」

「そうね。騎士になるのはまだまだ先ね。一人になんか危なくてさせられないわ」

「もう一度、学院に通わせないのですか？」

「あれから何回か通わせたはしたけど……ね」

そう会話しながら、二人が先行する彼を見ているとルナに言われた通り、挨拶はしているようだ。

「オハヨウゴザイマスー」

「お！クウエス、おはよう」

挨拶された方の神父服を着た男性騎士は慣れたものである。

渋々とした顔で挨拶する彼に対して、元氣よく挨拶を返し、喋り掛けた。

「聞いたぞ、任務成功したらしいな。このまま順調に行けば、来年には騎士になれるかもしれないぞ」

「……………そう」

だが、彼は挨拶だけをして他は喋ることはありません、と言わんばかりにスタスタ歩いていった。

「相変わらずだなあ」

そんな姿を見て男性騎士は苦笑している。そんな彼らを見てルナと女性騎士も苦笑して会話しようとするが

「ルナあ！早く！」

何時まで経っても来ないことに痺れを切らした彼によって、それ以降の会話は終わらせることになった。

「はいはい、それじゃまたね」

「ええ」

その後、追いついたルナは彼を連れ立って幾分か歩き、ようやく執務室の一つに辿り着いたようだ。

目の前にある重厚な木製の扉に手を掛けた彼だったが

「ストップ。ちゃんとノックして相手から了承があってからよ」

どうやら社会の礼儀の一つであるノックをせずに扉を開けようとしたようだ。

「前にちゃんと教えたでしょ？」

「めんどい」

（別にしなくても大丈夫じゃないのか？意味分かん）

そう考えた彼だったが室内に、自分に取っての強敵、

シャツハがいるかもしれないとも考えると、嫌々ながら扉を叩き相手の返事を待った。

ノックをしてから数秒後、扉が室内の方から開く。その扉を開いた人物は彼の強敵、シスターシャツハであった。

彼女を見た途端、げんなりとした顔つきになった彼は

「う」苦勞である」

そう声を掛け、扉を開けた人物を極力見ないまま室内に入ろうとするが、そんな彼を出迎えたのは了承の返事ではなく

「あだっ!？」

青筋を浮かべたシャツハの拳であった。

「あにすんだ!おわっ!？」

いきなりの拳骨に、涙を目に浮かべた彼は反論しようとするが、自宅でルナにされたが如く、首根っこを掴まれてしまった。

彼より背が高いシャツハは軽々しく持ち上げている。

だが、朝にルナも軽々しく持ち上げていたことから、どうやらシャツハの力が強いのではなく、彼が軽いようだ。

「入口で殺し合いとか叫んだそうですね。

やはりあなたはヴェロツサ同様、一度、みっちり教育する必要がある

るようです!」

「ひい!?! や、やめ」

怒りのオーラを纏った状態のシャツハに掴まれた彼は室内に消えた。

1・3 執務室（前書き）

主人公は子供

1・3 執務室

執務室に入った彼は、シャツハに首根っこを掴まれたまま、隣にある書庫へと連れて行かれた。

その道中

「ルナ、カリム！助けて！」

「あらあら」

「シャツハ、きちんと教育して上げてね」

「勿論です」

「裏切り者があ！てかカリムは私の声が聞こえてないのか！？」

何だ！あらあらって！？」

「こら！暴れたら、もっと酷いことになりますよ！-」

「ひい！？この悪魔があ！」

「私はシスターです！」

「あだっ！？な、何も叩かなくても……」

と、騒がしく会話をしながら書庫へと消えた。

完全に書庫の扉が閉じるまで、騒がしさが消えることはなかったが、閉じられると室内には静寂が舞い戻ってきた。

さすがは聖王教会の執務室と言った所か。なかなかの防音性があるようだ。

そんな残った二人にとって、今回のようなことは珍しくないのだろう。

「いぎげんよう騎士ルナ」

「ええ、ごきげんよう。騎士カリム」

二人は何事もなかったように会話を始めるのであった。

⋮

⋮

⋮

⋮

⋮

「今日はここまでです。クウェス？わかりましたか？」

疲れた。非常に疲れた。

現在は朝ではない。既に夕方だ。わかるか？

ゆ・う・が・た・だ！！

窓の外を見ると夕陽が今にも沈みそうな時間帯である。

……長い長すぎだよ、シャツハの説教＋勉強会。

まさか延々と休憩時間も無しに教育されるとは思ひもなかった。

ちよつと調子に乗って叫んだだけじゃないか！

ちくしょうが！

……「二の次は踏まないようにしなければいけない。

ふむ、今度からは、思っても口に出さず心の中に留めておこつ。

「……聞いていますか？」

「ひゃ！？」

し、シャツハよ、顔が近いし怖いぞ。朝に見た、ルナの怒った顔が可愛く見えるほどの形相だ。

それにしても、8時間も喋ってばかりだったのに疲れてないのか？

……コイツ、本当に人間なのか？

……まさか……コイツ……

ルナと同じ様にユニゾンデバイスではあるまいな。

むう……ありえるか。

なら差し詰め、カリムが主と言ったところか。いや……ヴェロッサか？

「ク・ウ・エ・ス？」

っと、考えるのは後にしよう。シャッハの拳が飛んできそうだと。

「わかったんですか？」

「イエス。殺人ダメ絶対」

そう、安易に人を殺すとか言っちゃダメ。と言つか昔に習ったことだからちゃんと覚えていた。

今回はただ叫びたかったんだ！何か知らないがムカムカきてしまったから叫んでしまっただけなのだ。

「そうです。やっと思い出したようですね。次は忘れたら駄目ですよ？」

「うむ」

忘れていない。ちゃんと私は覚えていた。

しかし、しかしだ、ここはシャッハに逆らわないでおこう。それに

本当にムカついた時はいいよね？

さて、それよりも

「腹減った」

さすがに腹が減ったぞ。

というか今の時間帯だと昼ご飯を乗り越して晩御飯になるではないか。

ああ……一食分の満足感が得られないとは、実に勿体無い。

一日三食は絶対なのだ！

「あら、もうこんな時間なのですね」

「時間がわからないほど熱中していた……だと」

「誰のせいだと思っているんですか！大体あなたが！！！」

「先程、今日は終了と聞いた。シャツハセンサー、ありがとうございました」

再び説教系を始めようとしているシャツハにはうんざりだ。隣の執務室に行こう。カリムとルナがいるはずだ。

「あつ！こら待ちなさい！」

シャツハなんて無視、無視。

今の私は背中とお腹がくつつきそうなのだ。

早く家に帰ってルナのご飯を食いたい！今日は何だろうか？

ワクワクしてきたぞ

そう湧き上がる気持ちを抑えながら、私は執務室へと繋がっている扉を開けた。

むっ、どうやらルナは居ないようだ。

カリムだけが高級そうな机で仕事をしている。どこへ行ったのだろう。

「あら、クウエス。シャツハとの勉強会は終わったの？」

「終わった……ん？あ……し、しまった!？」

「ん？どうしたの？」

わ、忘れていた。

：

：

：

「クウエス？」

執務室に備え付けられている書庫から出てきた彼を見てカリムは困っていた。

（どうしたのかしら？）

扉を開けた彼に自分が喋り掛けると口を開いたが、すぐに口を閉ざして何やら考え始めたのだ。

その後ろでは首を傾げたシャツハが立っており、彼女でも彼が何を考えているのか、わからないようであった。

（ルナが居ないからかな？）

先程まで自分の仕事を手伝ってくれていたルナは、とある事情で席を外している。

彼にとって親のような存在のルナが居ないことで寂しくなったのだろうか。

と、考えたが

（それはないかな？ルナが居なくても寂しがるような性格でもないでしょう。だったらお昼も食べてないし、お腹でも空いたのかな）

そう考えると席を立ち、側まで近寄った。

すると、彼は俯けていた顔を勢い良くガバリと上げた。

その顔は何やら思い付いたようにニヤリとした顔である。

そして彼は自信満々である！と言つかのように開いたままである扉を拳で叩いた。

「部屋に入ってもいいだろうか。騎士カリム？ 私入室したいぞ！」

：

：

：

危ない危ない、ノックをするのを忘れていた。再びシャツハの説教は嫌だからな。

普段はやらなくても大丈夫だと思うが、ここにはシャツハがいるか

らな。

きちんとせねば。

そう考えた私は一度、扉を閉める選択を取ろうとしたが、素晴らし
い案を思い付いたのだ。

そうさ

ノックをし忘れたのならノックをすればいいじゃない！

という、素晴らしすぎる考えを思い付き、扉を叩いたのだが

目の前にいるカリムの様子が変だ。顔を赤らめて目は潤ませ、全身
がふるふる震えている。

怒っている？

私の行動は違うのか？

むう、カリムに怒られても恐くないが一度戻るか

しかし聞いてみるだけ聞いてみよう。

「何が駄目だっ」「可愛い」「むがつ！」

な……んだと、いきなり抱きつかれたぞ！コイツは変態だったのか！？

「あなたもきちんと成長しているのですね。2年前に比べたら恐ろしい成長力です。ああルナが羨ましい。私も子供が欲しくなりそうです」

「ぐえええ！？」

ぐっ、抱き締められて声が出せない！てか子供扱いだと！？

私は12歳だぞ！もう立派な

「今回はノックしなくてもいいのよ。でも相手のことを考えてくれたのね。本当に成長したわね」

って胸に鼻と口が塞がれて息ができな……い……い、いきがあ……

「よしよし 良くできました」

「……………」

「き、騎士カリム！離れてください。このままではクウェスが窒息死しますよ！」

「あらあら」

1・4 執務室のソファ―（前書き）

彼は子供扱い

1・4 執務室のソファ―

太陽が沈み、多くの者が夕飯を取っている時間。

とある執務室では、客人用の高級感溢れる黒いソファ―に、カリムが座っていた。

横にはシャツハが立ったまま、何やら書類を読み上げているようだ。

「子供のほっぺは、ぷにぷにね」

だが、カリムはただ座っているだけではない。

修道服に隠された自身の柔らかな太ももに、眠っている彼の頭を置いて座っているのである。

俗に言う膝枕状態だ。

そして彼の顔はカリムの女性らしい、しなやかな指先によって遊ばれているようだ。

「わ！見て、シャツハ！伸びるわ！？」

「あんまりクウェスで遊ばないで下さい。それより報告を……」

「もう少し待つて。普段は過保護なルナのせいで、こんなことできないんだから！今のうちに……」

教会内に問わず管理局でも美人と声が高く、絶大な人気を誇るカリムに、膝枕をされている彼。

端から見れば羨ましいこと、この上ないだろう。

だが、それは周りから見てもあり、膝枕をされている当の本人は

子供扱いするな！

と目を覚ましていたら、叫んで拒んでいただろう。

しかし、今の彼は寝ているのだから、どうしようもできないのが事実である。

「お持ち帰りしていいかしら？」

「駄目ですよ。」

「むう」

顔を掴まれて遊ばれている彼は、当然のごとく顰めっ面をしている。

だが

「はう……可愛い」

そんな仕草もカリムにとっては、可愛らしい仕草に見えるらしい。

完全に子供扱いな彼である。

「良い子 良い子」

顔を近付けて、そう言ったカリムは、垂れ下がってきた金色の光沢を放つ髪を耳に掛けながら悦に浸っているようだ。

そんな姿を見て、心の中で溜め息を吐いたシャツハは、カリムが満足するまで報告を待つのであった。

それから大分経ち、ようやく満足したのか。笑みを浮かべ頬を上気させたまま、カリムは顔を上げた。

それを見たシャツハは長年の経験で分かったのだろう。報告を始める。

「前回の任務で、クウエスの騎士としての必要任務課程は半分がクリアされました」

「この子も頑張ったのね。よしよし」

「経った一年でここまで漕ぎ着けるとは思いもしませんでしたよ」

再び顔を下に向け、彼の頭を撫で始めたカリム。

そしてシャツハは信じられないと、でも言わんばかりにそう呟いた。

その呟きを聞いたカリムは、悦の入った顔つきから一変して、哀愁感漂う顔つきになると頭を撫でながら言葉を紡いだ。

「やっぱり……この子が戦闘用に造られたのも関係しているんじゃないかね……」

「……はい……クウエスは、こと戦闘においたら既に騎士のなかでも上位に位置しますから……」

そう話した後、一瞬の静寂が執務室を覆う。

しかし

「あと残っているのは、表での活動や教会内での仕事だったかしら？」

すぐさま、顔を上げたカリムによって静寂は打ち切られた。

それに従いシャツハも何事もなかったかのように装い、話し始める。

「はい、今後は教会内での仕事・管理局側との合同任務が大半になりそうです。」

「そう。教会内での仕事は私も傍に居てあげれるわね。管理局との場合は、ルナが付いてるから大丈夫でしょう」

ね。……あら？そう言えばこの子、デバイスどこにやったのかしら？」

「それなら、先ほど書庫のほうで……」

その後も、執務室に用事を終わらせたルナが帰ってくるまで、話は続けられた。

…

…

…

「只今、戻りました。ってカリム！クウェスに何してるんです！離れて下さい！」

「あら、この子が望んだのよ？それにさっきは、私に抱き付いて来たんだから」

「そ、そんな馬鹿な……退いてください！クウェスはアタシの主なんですよ！その役目はアタシがやります！」

「本人の意思を尊重しなきゃいけないわ。ほら見て、すごく幸せそうな顔してるでしょ？」

「むむむ……」

1・5 執務室

「カリム！退いてください！」

「ルナは毎日一緒に居るんだから、今日ぐらい良いでしょ？」

執務室では、今だに寝ている彼の取り合いをしていた。

「アタシが面倒見るんです！」

しかもルナはフルサイズの姿に変わっており、カリムから彼を取り上げようとしているようだ。

フルサイズになったルナの大きさは、大体160cmを超えているぐらいで、年齢設定は18、9歳か。

冷水のような青い瞳。修道服に隠されてはいるが、しなやかな肢体がそこにはあった。

整った顔立ちは、目の前にいるカリムにも負けて劣らず、多くの者を虜にする気品に満ちた美しさがある。

そして、腰の辺りまである、若干ウェーブが効いた白金の髪が優雅に揺れていた。

「実質的な保護者は私よ？」

一方、カリムは彼を抱き締めたまま離そうとしない。

「そんなの関係ない！」

「くか」

そんな騒がしい間も眠り続ける彼は、素晴らしく度胸が坐った人間であろう。

「騎士カリム。そろそろクウェスの訓練時間です」

その時、今まで我関せずといった感じに横に立っていたシャツハが二人に話し掛けた。

「あら、もうそんな時間？」

「うわぁ……ホントだ」

二人が見た高級感溢れる柱時計は20時に差し掛かるうとしていた。

騎士見習いである彼は、夕食後の21時から戦闘訓練が課せられているのだ。

「クウエス？起きなさい」

「起きて！訓練の時間だよ！」

訓練時間が差し迫っていることに気付いた二人は喧嘩を止め、彼を起こし始めるが

「……くか……」

彼が起きることはなく、ぐーすか寝たままであった。

「もう、しょうがない子ね」

「あつ、アタシがやります！」

「シャツハ、早く行きましょう」

「あ、ちょっと！」

結局、カリムに抱かれたまま、彼は訓練場に連れて行かれたようだ。

その後、訪れた室内訓練場では

「な！？カリム様に抱っこ……だとう！？」

思わず、剣型のデバイスを落とす者

「教官！何故アイツだけ、何時も特別扱いなのですか！アイツが化物なのは知っていますが、待遇が違いすぎます！」

「いやあの子は12歳だよ。君と4つも違うじゃないか。多めに見てやれよ」

「納得できません！」

自身の担当騎士に食ってかかる者

「はあはあ、それにしてもカリム様もルナちゃんも可愛いな。はあはあ」

「いやいや、クウエスキゅんの寝顔の方が、はあはあ」

訓練でなのか、また別の意味でなのか、分からないが息を荒くする者

といった、騎士見習い達がいたそうな。

「……あ？」

「あら、やっと起きたの？」

羨望と願望、そして殺気と嫉妬の視線を感じた彼は、ようやく目を覚ました。

どうやら、こと身の危険においては、体が自動的に反応するらしい。

⋮

⋮

⋮

「意味が分からない。目が覚めたら訓練場？」

全く持つて意味が分からない」

「ほら、周りは始めてるよ。クウエスも始めよう?」

「ルナ、ちょっと待て」

現在は21時ジャスト。

既に太陽は沈み、教会も大幅に活動停止している時間帯である。

そんな時間に私は、聖王教会内にある屋内訓練場にいた。

いや実を言つと意味は分かるんだ。いつも通りの訓練の時間だろ？

周りにも数十人の騎士見習い達と、その上司である騎士達が訓練を始めているのが見えるからな。

騎士見習いである私達は、ほぼ毎日と言つていいほど戦闘訓練をしないといけないのだ。

それは騎士になるために重要なことで、しなくてはいけないことだと言つのはわかる。

しかし、しかしだ。私は元氣溢れる奴らと違って

「お腹が空いているんだ。

ルナあ、何で訓練前に起こしてくれなかったんだあ」

「我慢！我慢だよ。ね？」

「も、もう我慢は超えている！昼も食べてないんだぞ！」

現在の私は、既に二食も抜いているのだ。

ルナが買ってくれた高級らしい神父服の上からお腹を押さえて呻くのは当然だろう。

「ご飯は訓練が終わった後でね。準備はできた？そろそろ始めるよ？」

私の肩に、腰を下ろしたルナはそう言うが……

何だか、いつもと違って不機嫌だ。口調はいつも通りなのだが、足をぶらぶらさせ、どこか不機嫌そうな表情なのだ。

一体、どうしたのだろうか？

そんなことを考えているとルナは、やる気も気力もありません。と言った感じの私を小さな手で撫でてきた。

「クウエスのためになるから頑張ろう？」

「むう……どうせ仮想相手だろ？あれは嫌いだ。」

感覚が微妙に違うし。と呟く。

そう、仮想は実体と違ってあまり臨場感がないのだ。攻撃を食らってもあまり痛くないし……

「ほらほら、終わったらいっぱいご飯食べさせて上げるから」

「むう」

「ね？」

「……帰りたい。帰ってルナのご飯食べたい」

「あら」

ルナは私の言葉を聞いた瞬間、先程までの表情が嘘だったかのように笑みに一変した。

今の言葉で表情が変わった？

意味が分からないな

「やっぱりカリムよりアタシの方が懐かれてるんだから」

よほど嬉しいのか、手を頬に当てて悦に浸っているようだ。

つて、ご飯のことを考えたら、訓練どころじゃなくなった！

私は急いで壁際まで移動すると、設置してある端末を開く。

そして管制ルームにいる大人達に連絡を取ると、ここ一年で顔見知りになった男に繋がった。
。

『クウエス、どした？』

よかった、別の管制官とは喋りたくないからな。馴れている男で助かったよ。

「こちら、騎士見習いクウェス・ロクサス。訓練終了。帰宅する」

『ちよっ！？まだノルマ達成して「帰宅する」……ツーツー……』

強制的に通信終了だ。

こういうのは早く切った方が良く、前にハヤテに教わったからな。

「今日は何を食べさせてあげようかな？お肉かな、お魚かな？」

さてさて、トリップして思考が料理に言っているルナを連れて帰宅
するとするか

「私は肉がいいぞ」

「あら、じゃあお肉料理にしようね。ウチにある食材で作れるのは
……」

やったね

今夜は肉料理だ！

今日1日は散々な日だったから最後ぐらいは幸せにならないとね

ふう、やっとご飯にありつけっ！？

後方から何か来る！？

私は危険を察知して、すぐさマルナを抑えたまましゃがむ。

「っ！？」

「きゃっ！？」

「はぁッ！！！」

ブンッ！

すると、何やら気合いの入った声と共に、何かが頭上を通り過ぎる

風の音が聞こえた。

あぶなっ!?

「ち、ちよつとクウエス!？」

いきなり押さえられたルナは声を上げるが、今はそれどころじゃない!

「よつと!」

そのまま私は素早く前に転がる。そしてすぐに立ち上がりつつ反対方向

つまり攻撃を仕掛けてきた相手の方を向き、顔を見る余裕はないから、

「いきなり攻撃とはいいい度胸だな。一体、どのどいつだ。ああん?」

そう床に喋りながら、攻撃できる絶妙な間合いを取って……取って……

「……シャッハセンサー……」

顔を上げて相手の見たら、絶望感に押しやられた。

何故コイツがここにいるんだ!?

「クウエス！訓練をサボるとはどういう了見ですか!」

貴様はカリムの護衛だろうが!?

「聞いているのですか？それにルナ！あなたが付いていながら……」

「え？な、何？どうしたの？」

既に帰っていたのではないのか!?

「どうしたの？じゃありませんよ。クウエスがいきなり帰ろうとしていたんですよ」

「え!？」

ふと管制ルームがある二階部分を見上げてみると、周りの管制官達と喋っているカリムが見えた。

ちっ、道理で周りの奴らがギクシャクしているわけだ。

カリムは聖王教会内でかなりの立ち位置にいるからな。

そんな存在と普段は会うことが、稀である騎士見習い達は緊張しているのだろう。

「まったく！ルナ！あなたが付いていながら……」

「い、ごめんね。今からきちんと訓練させるから」

シャッハのお怒りの声を聞きながら視線を辺りにやると

騎士達は至って何時も通りで、緊張しているのは騎士見習い達だけと言っのがわかった。やはりカリムの影響か。

「いいですか？クウエス。あなたは自分の立場を……」

騎士甲冑に身を包んだシャツハはトンファー型のデバイスを手にして私にも説教を始めていたようだ。

まったく話を聞いていなかった私だが、今にも戦闘という名のお説教が始まりそんな雰囲気である。

いかな、デバイスなしでは分が悪いかもしれない。

私も愛機であるヤクトを……

あれ？無くない？

「何時まで経っても訓練を始めないと思ったら、いきなり帰宅する。だなんて！」

シャツハのお説教を聞きながら懷に手を入れると我がデバイスであるヤクトフロントがなかった

や、ヤバい……無くしたかも……

ああ……だから、インテリジェント型がよかったんだ。

確かに私のヤークトフロントにも人格があるから喋りはするが、アイムドデバイスだからなあ

インテリジェント型みたいにサポートしてくれないんだよね

一体、どこで無くしたのだろうか

むっ！今の説教から脱出するのに良い手が思い浮かんだぞ

「違うんだ、シャッハ。私の意見を聞け」

「聞いてください！でしょうが！言葉を慎みなさい！」

ええ〜ここまで突っ込んでくるのかよ。

「ヤクトがどこにもないんだ。これでは訓練はできない！」

「左の内ポケットにはいつてるよ？」

え？ルナ？

私が両手を広げシャツハに訴えると、肩に座るルナが、さも当たり前のように喋り始めた。

てか左の内ポケットだとお？

私は左利きだから右側しか使わないというのに、コイツは何を言っているんだ。

「たぶん、そこだと思っけど？」

まあ一応探つてやろう。どうせな……

「……………」

……ホントだ……

私がルナに言われた通り、探してみると簡単に見つかった。

ロザリオを模した私の愛機、ヤークトフロントが……

てか誰だ！こんな場所に入れた奴は！

ルナが知っていたということは犯人はルナか！

しかも機能がOFFになっているではないか！

誰だ！……あつ機能OFFしたの私だ。

昨日、ルナがヤクトに目覚まし時計を設定していたからOFFに
したんだ。

「あるじゃないですか。さっさと訓練を終わらせなさい。今日のノ
ルマを達成したら食事に行きますよ。何時もの追加訓練は無しです
から頑張りなさい」

なん……だと……

今日はルナのご飯だけでなく、シャッハ達からもご飯を頂けると
お！

「頑張りやす……！」

一丁やったるぜ！

ヤクトも機能をONにすると

【Guten Abend Meister】

（こんばんは、マイスター）

無機質な年老いた男の声が聞こえる。いつも通りの声に安心するよ。
ごめんよ機能OFFなんかにして。

「訓練開始だ。準備を頼む」

【Jawohl】（了解）

そう喋ると、調整を始めたヤクトを待ったため、また訓練で怪我をしないように柔軟や体操を始める。

あ、そうそう。

ヤクトフントは別名、獵犬という意味だ。誰が付けたかは分からないが、なかなか気に入っている。

まあ大方、私に聖王教会の獵犬になれ、という司祭達のメッセージがあるのだろう。

優しいカリムとルナに保護されてよかった。別の司祭達だったら私をここまで成長させることはできなかったかもしれないからな。

そう言えば先程まで怒っていたシャツハが居ないな。お得意の移動魔法で管制ルームまで戻ったのか？。

まあ、いいか。どうやら、戦闘は回避したようだ。よかった、よかった。

というかアイツも晩御飯を食べてないからお腹が空いているのだろう。

だからイライラして、トンファーで殴ろうとしたに違いない！

まったく、食い意地が張る奴だ。

1・6 訓練場

「準備はいい？」

「ああ」

彼の返事を聞いたルナは、すぐさま空中に現している画面を操作し始めた。

一方、彼は自身の手にある銀色のロザリオを模したデバイス、ヤークトフロントを眺めている。

ただ普通のロザリオと違って逆十字になっているようだ。

また銀一色かと思いきや、十字の中心点に黒光りする小さな球体が3つ埋め込んである。

これがデバイスのコアなのだろう。

それに加えて幾つもの鋼色の鎖がジャラジャラとついていることから、普段は首をかけるネックレスタイプであることが予測できる。

「ヤクト」

【A n f a n g】（起動）

略称で名前を呼ばれたデバイスは呼びかけに答え、無機質で年老いた男性声を上げた。

一瞬、淡い光が彼を覆ったかと思うと、普段通りである神父服の彼が姿を現す。

違う点は手や足に銀色に光り輝く金属型の手甲やブーツを装着していることだろう。

特に手甲には黒光りする小さなコアが両方ともについている。

そして、その右手には一つの武器が掴まれていた。

ただ音もなく、静かに手中に収まる一つの武器。それは白銀のフレームで出来た二メートル弱ほどの戦斧であった。

先端には槍が付いておりその横には斧頭。そして反対側には突起が

取り付けられている。

どれも本物と見違わんばかりの鋭利さを醸し出していた。

その下には黒光りするコアと、灰色の六連装のオートマチック型、カートリッジシステムが装着されている。

ヤークトフロントは曰わくハルバートタイプのデバイスであるようだ。

「それじゃ、始めるよ」

「了解」

準備が整った彼にルナの声が届いた。

気のない返事を返す彼であったが、表情は至って真剣であり、目の前の広いグラウンドの一角まで歩みを進める。

「さてさて、訓練と言えど、やるのならば真剣にやらないとな」

そんな彼の横では、先日、彼が倒した魔導兵に似ている形の魔導兵

器と戦っている騎士見習い達が見えた。

「……………」

一体倒すのに四苦八苦している騎士見習い達を見た彼は、侮蔑するわけでも嘲笑うわけでもなくただ無機質に眺めていた。

「……………腹減った」

そんな彼が歩を進めた場所でも、背後にいるルナの操作によって20体もの魔導兵が虚空から姿を現す。

「始めるよ!」

「うむ」

ルナの声に頷くと、黒光りする三角の魔方陣――古代ベルカの術式を、足元に展開させた彼。

「早く終わらせたいからな。速攻で決めるぞ」

【Ja】

声に呼応した戦斧に彼が力を込める。すると戦斧は煌々とした金色の光明を放ち始めた。

刃先まで、その光が届くとバチバチと切っ先を金色にほとばしる電流が帯電する。

彼自身が持っている魔力を雷電に変化させ、戦斧に付与したようだ。

変換した魔力を高密度に付与し、打撃として打ち込むのは変換資質を持つベルカ式術者の基礎にして奥義と言える技法である。

彼はどうやら雷の変換資質を持っているようだ。

バチバチと電流を放出する戦斧の柄を魔導兵に向け、槍の穂先を背後にやる。

「ふう」

そして一息吐くと

【Donner well】

「雷光一閃！！！」

淡々と喋るヤクトの声が出た後、彼は気合いを入れた声を上げて、戦斧を振り払うように横に薙いだ。

未だ、魔導兵と距離があるのに薙いだのだ。

すると

バチッ！！！！

戦斧の斧頭から金色の閃光が迸り、放たれた雷光は大気を焦がしながら魔導兵に襲いかかった。

彼は打撃ではなく雷をそのまま放出したのだ。

近距離用の武器しかを持っていない魔導兵は、防御体制をとるもの

の、為すすべもなく攻撃を受ける。

高密度に圧縮、放出された雷光はいとも簡単に魔導兵を撃ち抜き、前面にいた三体が崩れ落ちる。

「初撃成功つと」

その光景を見た彼は満足げに声を出し

「さてさて」

普段より深い笑みを浮かべる。そして調整するように、今だ電流迸る戦斧を頭上で何度か回転させる。

「早く終わらせてご飯を食べないとね」

そう呟いた矢先、右手で先程と同じ様に構えた彼は、一気に魔導兵の中に飛び込んだ。

その俊敏たる動きは、長大な斧を手にしているとは思えないほどの速さだ。

たった一人で魔導兵の群れに突入した彼は絶妙な間合いを取りながら自身の戦斧を振り回す。

横に一閃すれば真っ二つ

縦にも一閃すれば真っ二つ。

魔力によって増幅・鋭利化した斧は次々に魔導兵を葬り去る。

まさに蹂躞。

今の彼にはこの言葉が似合っだろう。

彼が槍やピックを使わず、斧頭だけを振るう度に魔導兵の数は減っていった。

この程度の相手には斧頭だけで十分と言っことだろうか。

「あと八体」

そう呟きながら、片時もその動きを止めることはなかった。

「あはっ
」

無我夢中で斧を振り回した彼は、気づかないまま、無邪気そうに笑う。

心から何かを破壊することを喜んでいるのだ。

「
」

笑みを浮かべ、ギリギリと擰猛そうに瞳を輝かせた彼は、まさに猟犬のごとく魔導兵に襲い掛かる。

「
.....」

そんな歪な笑みを浮かべる彼を見てルナと、管制ルームから見る力

リムは悲しそうに目を伏せた。

一方、同じように周りで訓練をしていた見習いの誰かが

「……化け物……」

そう呟くのが聞こえた。

その数秒後、開始早々にして全ての魔導兵が駆逐され、彼の訓練は終了を迎えるのであった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8082x/>

神父服の彼

2011年11月11日05時12分発行